

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

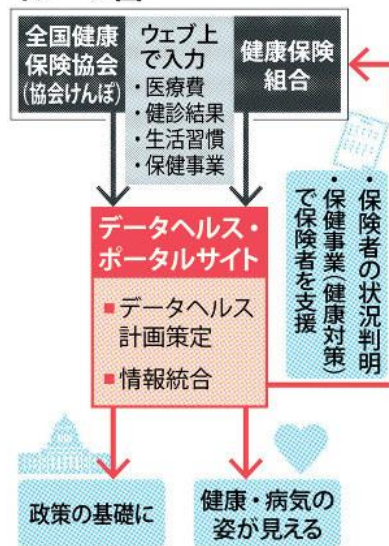
## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4031 号 2017.11.21 発行

### 健保情報 サイトに統合 6773万人分、病気予防に活用

毎日新聞 2017年11月20日

#### データヘルス・ポータルサイトのイメージ図



東京大が12月から、国内6773万人分の健康診断、医療費、生活習慣などのデータを集計した分析・支援ウェブサイトを運用する。1399の健康保険組合(2946万人)と、中小企業の全国健康保険協会(協会けんぽ、3827万人)が持つデータを統合することで、業界別・地域別の健康状態の傾向や、どの健保組合がどれぐらい医療費を使い、どんな対策を取っているかを比較検討できる。病気の予防や医療費適正化のための政策立案に活用が期待される。専門家によると、世界で初めての試み。【斎藤義彦】

この「データヘルス・ポータルサイト」は厚生労働省の補助金で東京大政策ビジョン研究センターの「データヘルス研究ユニット」(仮称)が構築した。がんや高血圧症など疾病別の医療費、年次や年齢による医療費の変化、血糖値やメタボなど健診の結果分析・実施率、運動や喫煙など生活習慣の調査結果といったデータが一つのサイトに統合・分析され、一目で分かるようになる。集合データを集

計する仕組みのため、個々の加入者の個人情報特定される恐れはなく、個人情報保護法上の問題はない。

国は2015年度から健康保険組合など全ての医療保険者に、健診データやレセプト(診療報酬明細書)の分析をまとめた3年間の「データヘルス計画」を作るよう指示している。しかし、計画書は主に紙で集められ、様式もバラバラで分析・比較が困難なため、対策も打ち出しにくかった。データヘルス・ポータルサイトは、これを電子化し統合する。

各保険者がデータをサイト上に入力し、来年度から3年間の健康対策(保健事業)の内容や数値目標を複数の選択肢から選ぶとデータヘルス計画ができあがる仕組み。1880ある市町村国民健康保険(3294万人、国保組合含む)も加入を検討する。将来、属性を入力するだけで傾向と対策が出るよう進化させる。企業側からも職員の体調不良による仕事の能率低下などの情報を集め、関連を分析する。研究ユニット代表の古井祐司自治医科大客員教授は「健康に関する科学的証拠に基づく政策立案ができる。大きな社会実験になる」と話す。

#### 解説 特性に応じ分析可能 性別、年齢など

東京大が運用する「データヘルス・ポータルサイト」は、いわば「顔を持った」データの集合体だ。

健康保険組合などの医療保険者は、各企業の加入者の具体的な状況を知っており、生の健康・医療データを集計・分析している。病気の実態を示すレセプト(診療報酬明細書)

のデータに加え、健康診断結果や生活習慣のアンケートといった保健事業（健康対策）のデータもある。データヘルス・ポータルサイトでは、これらを統合し、男女別、年齢別、企業規模別、地域別など、特性に応じた逐次分析が可能になる。

レセプトや40歳以上の健診データは厚生労働省の「レセプト情報・特定健診等情報データベース（NDB）分析システム」に集積されているが、いわば「顔のない」データで、分析は研究者まかせ。住所さえあいまいで、現場に即した健康や医療の分析は難しい。対策にまで踏み込めるような総合性はなかった。

国は、医療や介護などの個人データを統合する「保健医療プラットフォーム」を2020年度に稼働させる大目標を立てている。個人情報流出が起きないように、万全の対策が必要なことは言うまでもないが、国民健康保険と介護保険の保険者である市町村がデータヘルス・ポータルサイトに参加すればほぼ全国民を網羅することになる。より大きな医療・健康・介護のプラットフォーム作りへのジャンプ台になる可能性がある。【斎藤義彦】

#### サウジ 拘束中の王子らを虐待か 拷問や自殺未遂情報も 毎日新聞 2017年11月20日 ムハンマド皇太子=ロイター



【カイロ篠田航一】現職閣僚や王族ら200人以上が汚職容疑で拘束されたサウジアラビアで、拘束中の王子らが虐待を受けている疑惑が浮上している。米紙ニューヨーク・タイムズや中東のニュースサイトなどが伝えた。虐待が事実とすれば、「次期国王」と目され、政敵の粛清を強行するムハンマド皇太子（32）の手法に批判が高まる可能性がある。

報道によると、拘束者のうち17人が虐待されて治療を受け、このうち王子は6人。故アブドラ前国王の息子で、一時は次期国王候補に挙げられた王子のムトイブ前国家警備相も拷問を受けたという。また、自殺を凶った王子もいる模様だ。

サウジでは高齢のサルマン国王（81）から実子のムハンマド皇太子への権力移譲が進み、皇太子は国防相、経済開発評議会議長も兼任する。国家警備相だったムトイブ王子の拘束・解任により、国軍と並ぶ軍事組織の国家警備隊を長年率いてきたアブドラ家の「利権」も崩れ、サルマン家への権力集中が進んでいる。

サウジ司法当局は9日、高官らの数十年にわたる収賄や横領で1000億ドル（約11兆2000億円）が流用されたと発表。拘束者は銀行口座を凍結され、首都リヤドの高級ホテルに監禁されている。政府は拘束者の氏名や容疑の詳細を公表していない。だが、中東メディアによると、世界的大富豪の投資家アルワリード・ビンタラール王子、2001年の米同時多発テロの首謀者である国際テロ組織アルカイダの故ウサマ・ビンラディン容疑者の兄で、サウジ建設大手ビンラディン・グループの実業家バクル・ビンラディン氏も拘束されたという。

王族が統治するサウジで、王族利権にメスを入れる大規模な捜査は異例。産油国サウジは近年の原油価格低迷で経済的な打撃を受けており、拘束劇の背景には、大富豪の多額の資産を没収する目的があるとの観測も広がっている。

#### ごみ袋4色、分別8種類…認知症の母、捨て方わからず

朝日新聞 2017年11月20日

高齢などで自力でごみを出せなくなった「ごみ出し困難世帯」が全国で少なくとも5万世帯ある、という記事を9月に掲載しました。さらなる高齢化で今後も増える見込みですが、支援にはお金や人手が必要です。読者から届いた反響をもとに、各地の解決策を取材しました。

自治体支援、5万世帯が利用 9月19日付朝刊



9月19日付の朝刊では、74自治体（道府県庁所在市、政令指定市、東京23区）を対象に、朝日新聞が実施した調査の結果を載せました。ごみ出しが困難な高齢者や障害者の自宅まで、自治体職員らが普通ごみの回収に行く支援の有無をたずねたところ、東京23区や横浜市、名古屋市、大阪市など48自治体が支援をし、2016年度では計約5万3000世帯が利用していました。この10年間で支援自治体は1.6倍、利用世帯は4倍以上に増えていました。

朝日新聞デジタルのアンケート

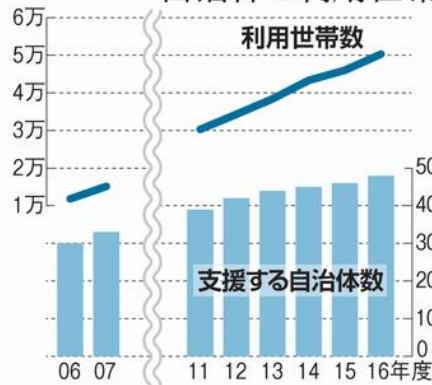
48自治体の5割強が「要介護1以上」といった介護保険制度の要介護認定などを支援の要件にしていました。また、6割弱の自治体が、利用者宅を訪れた際、声かけなどで安否を確認し、確認が取れない場合は家族などに連絡する「見守り」もしていました。

### 住民同士が支援 交流も

数十年前に開発され高齢化が進む、神戸市灘区鶴甲（つるかぶと）。マンションの4階に住む女性（73）は、夫に先立たれ、一人暮らしをしています。要介護認定は受けていないものの、不整脈などで朝は体調がとても悪いといいます。女性が「私の命綱」と話すのが、地域住民によるボランティア団体「鶴甲サポートセンター」が15年に始めた、住民によるごみ出し支援です。

センター発行のチケット「ハロー券」を買えば、不調や困難を抱える住民が、元気な住民からごみ出しなどの支援を受けられます。ごみ袋1袋を自宅前から集積所に運んでもらうには、ハロー券1枚（80円）が必要。代金のうち50円は支援する住民に、30

## 高齢者らのごみ出し支援をする自治体と利用世帯は増えている



### 高齢者らのごみ出し支援を実施している主な市区

札幌、盛岡、山形、福島、宇都宮、前橋、さいたま、千葉、横浜、川崎、新潟、甲府、名古屋、大津、京都、大阪、神戸、和歌山、鳥取、岡山、北九州、長崎、熊本、大分、那覇、東京23区  
道府県庁所在市と政令指定市、東京23区の計74自治体への6～9月の朝日新聞調査から。介護保険制度に基づく支援などは含まない

## 各地のごみ出し支援の例

### 住人同士で支援

玄関前に出されたごみを、同じ団地の住人が回収、ごみの集積所まで運ぶ



### 市区の職員が支援

自力でのごみ出しが難しい人の自宅まで職員が来て回収



### 中学生が支援（熊本県水俣市では）

高齢女性が持ってきたごみを一緒に分別する中学生。「これはスチール」、「アルミ」と中学生が分別。女性は「ありがとうね」と声をかけた



ごみの分別が困難な高齢者らに支給されるシール。ごみ袋に貼れば、生ごみと可燃ごみの分別が免除される

円はセンターの運営費に。無料だと支援を受ける側が気をつかってしまい、長続きしないからだそうです。

冒頭の女性宅のごみ出しを担当しているのは、センター事務局長の所（ところ）良靖（よしやす）さん（82）。週に3回程度、午前7時半ごろに女性宅を訪れ、玄関前に置かれたごみを集積所に運びます。約束の日にごみが出ていなければ、インターホンを押して安否確認もします。

神戸市には、高齢者らの自宅前まで市職員がごみ回収に行く支援がありますが、「原則要介護2以上」などの要件があるほか、回収は可燃ごみなどに限られます。「要介護認定は受けていないが、ごみを出せない」「新聞紙や段ボールも回収して欲しい」といった声を受けて、住民同士の支援を始めたそうです。所さんは「顔見知りになれて、災害対応にもつながる」と話します。

自治体のごみ出し支援がない地域でも、住民同士の助け合いが生まれています。仙台市太白区で町内会長をする真木（まき）泰博さん（76）は昨春、「町内会ボランティアグループ」を立ち上げました。メンバーは、平均70歳ほどの住民約10人。近所の体調が悪い高齢者のごみ出しをしたり、冬には灯油をストーブに入れる軽作業をしたり。町内会の役員には仕事などで忙しい人もいるため、幅広く地域の住民からボランティアを募りました。

真木さんは、高齢者の一人暮らし世帯などを一軒一軒まわって「困りごとがないか」をたずね、支援が必要な住民を見つけたといいます。真木さんは「ごみ出し支援は、朝の5～10分程度で済み、そんなに大変ではない。公金を使わず、ご近所と交流でき、手伝う側にも満足感がある」と話します。

#### **金銭負担 別居の子に求める声**

朝日新聞の調査では、ごみ出し支援をしている48自治体のほとんどが、利用料を取っていませんでした。高齢化で「ごみ出し困難世帯」が増加していくと、予算がかさんで制度の維持にも影響するのでは、という指摘があります。

大阪府の主婦（54）は、高齢の親と離れて暮らす家族に負担を求めてみてはどうか、とメールで提案してくれました。

「夫の親と同居しているので、同居の不満を抱えながらも、その分のごみ出しを自然としています。家族と離れて住む高齢者だけが、みんなの税金を使って行政の支援を受けられるのは、不公平だと感じます。『離れて住む家族』にも負担（結局はお金になると思いますが）をしてもらえば、支援を維持できるのではないのでしょうか」

国立環境研究所の小島英子客員研究員らは昨年2月、高齢の親と離れて暮らし、ごみ出し支援を親に利用させたいと考える40代以上の男女計約千人に、利用料を自分が負担する場合、いくらなら払うかをアンケート。結果は平均月2912円。安否確認がある場合は平均3603円でした。調査対象者のうち、現在、親自身のごみ出しをしている人に、親の様子を聞くと、「転倒の不安がある」「ごみが重くて大変そう」などの声が目立ったそうです。

小島さんは「高齢化で支援が必要な人は今後も増え、自治体財政は厳しい。支援の持続可能性を考えると、高齢者の経済状況に応じて、利用者負担を検討することも必要だ」と話します。

#### **集積所 中学生が一緒に仕分け**

「高齢者には、ごみの分別も大変です」。認知症の母親（84）と離れて暮らす京都市の女性（55）が送ってくれたメールを、紹介します。

「結婚して離れて暮らす私と妹が、母が暮らす実家の掃除や片付けに通っています。

母が住む自治体は、4色のごみ袋を使い分け、8種類にごみを分別するルールです。違うごみが混ざっていると、『収集できません』というシールが貼られ、置いていかれます。

先日、実家を訪ねると、ポリ袋や発泡スチロールのトレー、ストロー、瓶、缶が、すべてきれいに洗われて乾かされた状態で、大量に出てきました。母は、それぞれをどう分別

して捨てて良いかが、わからなかったのです。

町はごみを正しく分別してもらうために『ごみ分別支援イラスト』というチラシも作っていますが、文字が小さすぎて老眼の私には見えません。認知症の母でなくても、この細かい分別収集は大変ではないかと思います。

誰もが年をとります。資源の有効活用という趣旨はよくわかりますが、できない人もいることを認識して、もっとゆるやかな収集方法を考えて頂きたいと思った次第です」

分別が難しい高齢者をどう支援すればいいか。1993年から20種の分別をする熊本県水俣市を訪ねました。

11月上旬、平日の午後5時。同市の資源ごみの集積所に行くと、アルミ缶、スチール缶、小型家電、電気コード類などに分かれた分別用のコンテナがずらり。横には、自治会役員の他、同市立水俣第二中学の生徒が立っています。

そこに、ごみ袋を持った高齢女性が。中学生がすぐさま駆け寄り、「これはスチール缶」「これはアルミ缶」と分別していきました。

同中学では、生徒全員が資源ごみの日に月1回、自宅近くの集積所で分別をお手伝い。学校の方針で、この日は、部活より分別支援が優先。2年生の鶴田純也さん(14)は「部活がしたい時もあったけれど、近所の人とコミュニケーションをとれてうれしい」と話しました。

同市では、生ごみと可燃ごみも分別が必要。この分別が難しい高齢者らには市が、「分別ご免除シール」を支給します。シールをごみ袋に貼れば、可燃ごみの中に生ごみが混ざっても回収してくれます。

生ごみの分別を始めた当初、「バナナの皮は生ごみ、皮に貼ってあるシールは可燃ごみに分別を」と市報で伝えると、「高齢者には負担が重い」と市民の批判が相次ぎ、分別ご免除シールを作成。市内約1万2千世帯のうち、69世帯が利用します。

20分別でリサイクル率が上がったことなどで、ごみの総量は減りました。この結果、91年当時、「残り10年しか持たない」とされた市唯一の埋め立て地は、今年度時点で残り約40年に「延命」。リサイクルの収益は16年度で計約2千万円。市は各自治会に平均約40万円を還元し、自治会は、祭りの費用に充てたり、防犯灯を設置したりしています。

市環境クリーンセンターの竹下浩久所長は「分別が大変な高齢者もいるが、高齢化と過疎化が深刻な自治体ができることには限りがある。本人、家族、地域、自治体、ホームヘルパーなどが力を合わせる必要がある」と話します。

今回の取材では、「我が家で暮らし続けたい」と、不調を抱えながらも一人暮らしをする多くの高齢者に出会いました。食料品は宅配などで買っても、日常的なごみ出しの民間サービスは少なく、「自治体や住民の支援がなければ、施設に入るしかない」という人もいました。高齢化で「ごみ出し困難世帯」は今後も増える見込みです。環境を守りつつ、自治体財政や人手の面でも持続可能、その上、一定の公平感もある——。そんな理想的な支援をどう作っていくか。取材を続けます。(長富由希子)

「生活保護受けても馬券買う権利ある」と唱えた作家も… 『わかっちゃいるけど、ギャンブル! ひりひり賭け事アンソロジー』

産経新聞 2017年11月19日

『わかっちゃいるけど、ギャンブル! ひりひり賭け事アンソロジー』(ちくま文庫編集部編)

宇野千代は夫・尾崎士郎の夕食を作らず(何度も)マージャンにのめりこんだと告白し、五木寛之は生活保護を受けつつも車券・馬券を買う権利があると唱える。作家ら38人がギャンブルへの愛を記したエッセーを集めた。

マカオのサイコロ賭博に興じた北杜夫は「今度こそあの賭博場





をつぶしてやりたい」と息巻くが、各地で遊んだ柴田錬三郎は「未だかつてカジノを破壊させたギャンブラーは一人もいない」と断じる。つまり、負けた話題ばかり。

チンチロリンの勝ち方を聞かれた色川武大は「ツイているときだけやりなさい」。わかっちゃいるけど…。(ちくま文庫編集部編/ちくま文庫 820円+税)

## 性犯罪 認知行動療法で再犯防ぐ

毎日新聞 2017年11月20日



クリニックに通う男性は犯罪への衝動にかられた時、ミサガを握って心を落ち着かせる＝横浜市で、近松仁太郎撮影  
通院する元加害者 認知行動療法を続け

性犯罪の厳罰化を柱とする改正刑法が7月に施行され、4カ月が経過した。卑劣な事件をなくすには、加害者の更生が不可欠だ。民間病院で性依存症の治療を受ける元加害者2人が毎日新聞の取材に応じ、「何度も『これで最後にしよう』と思うが、やめられなかった。治療を受けるようになってから、ようやく生活習慣や異性観を変えないといけないと気づ

いた」と語った。

取材に応じたのは、横浜市にある性依存症専門治療院「大石クリニック」に通院する男性2人。強姦(ごうかん)致傷罪(刑法改正で強制性交等致傷罪に名称変更)などで懲役13年が確定し昨夏まで服役していたという男性(40)は「小学6年の時、外に干してあった近所の女の子の下着を盗んだことがきっかけだった」と振り返った。

男性は面識のない女性を直接襲うまでエスカレートし、21歳の時に強姦未遂罪(強制性交等未遂罪に名称変更)などで逮捕され、実刑判決を受けた。服役1年半で仮出所した後も性犯罪を繰り返し、再び警察に逮捕された。「自分では歯止めがきかなくなっていた」という。

刑務所出所後、保護司の紹介がきっかけとなって、クリニックの大石雅之院長の治療を受けるようになった。「性犯罪」の引き金となる原因を未然に排除する認知行動療法を続ける。夜は出歩かない、人混みで女性に目の焦点を合わせないなどのルールを守り、性的衝動にかられた時は、姉からもらったミサガ(手首に巻き付ける刺しゅう糸のお守り)を握り自分に警告する癖をつけている。

もう1人の男性(42)は「小学6年生の時に周りから受けたいじめがストレスになり、1年生の男児を無人の保健室に呼び出して下半身を触ったことが始まり」と告白する。

中学進学後もいじめを受けた。再び、公園で幼い男児の体を触るなどの行為をやめられず、卒業直前に逮捕されて少年院に入った。出院後も同様の事件で3回の逮捕歴があり、刑務所にも入った。

刑務所出所後、しばらくは母の介護に専念したが、約3年前からクリニックに通う。週1回、自分の経験を語ったり、他人の経験を聞いたりする集団ミーティングに参加し、自分を客観的に見つめようとしている。「今も(男児に)触りたくなることがある。でも一昨年、母親が亡くなり、『もうしない』と決めた。クリニックの就労訓練を受けて始めた清掃の仕事にもやりがいを感じていて、今は性犯罪に気持ちがいなくなっている」

「男が痴漢になる理由」(イースト・プレス)を8月に出版した斉藤章佳さん(38)は、性依存症の治療をする「大森榎本クリニック」(東京都大田区)で精神保健福祉部長を務める。12年間にわたる治療経験から「痴漢をするのは、性欲が強く、交際相手や妻がいない『モテない男性』というイメージがあるが、そうとは限らない。犯罪と無縁に見える男性や既婚者にも常習者はいる」と話す。

「女性は痴漢をされて喜んでいいる」などとゆがんだ思考を持つ患者も多いといい、「痴漢を繰り返す加害者の考え方を把握し、治療方法に生かしていくことで一人でも被害者を減

らしたい」と語る。【近松仁太郎、巽賢司】

### 再犯率は2割

法務省がまとめた2016年の犯罪白書によると、強姦・強制わいせつ罪で服役して11年に刑務所を出所したものの、15年末までに同じ罪名で再び刑務所に入った人の割合は約20%だった。性犯罪の再犯リスクの高さをうかがわせている。

### 宮田小児童がサポーターに 認知症学び理解

長野日報 2017年11月20日



寸劇や手作りモデルを使って分かりやすく認知症を説明する連絡会スタッフら

宮田村内の福祉関連6事業所で作る村サービス事業所連絡会が、宮田小学校の児童を対象とした認知症サポーター研修を始めた。4年越しの検討を経て実現した子ども向けの研修で、連絡会事業所スタッフが寸劇や手作りモデルで分かりやすく説明。「おじいちゃん、おばあちゃんが大好きな宮田村でいつまでも元気で暮らしていけるように、いっぱいお話を聞いてあげて」と教えている。

連絡会の要請を受けた同校では今年度、4年生が特別活動で時間を確保。17日に同校梅の子ホールで初めての研修が行われた。参加した約90人の児童たちは認知症について学び、どう接したらいいのかを考える機会にした。

身近なところから認知症を理解していくために設定したテーマは「おじいちゃん、おばあちゃんに僕ができること」。指導担当のキャラバンメイトは、認知症になると、頭の中の記憶のつぼから情報が出せなくなったり、情報を入れられなくなることを示し、「おじいちゃん、おばあちゃんが笑顔になれるように、何回も教えてあげてね」。「もの忘れの病気は薬があります。変だと思ったら、お父さん、お母さんに教えてあげて」と教えた。

受講した児童たちには、認知症の人に対する理解者の目印として「オレンジリング」が配られる。開講に当たり連絡会の大石ひとみ代表は「オレンジリングを持ったら役割がわかります。どんな役割を果たしていけばいいのかを学んでほしい」と呼び掛けた。

研修は、みんなで認知症の人を支えることができる地域をつくるために、子どもたちから理解を広げていく取り組みで、将来の職業として福祉の仕事を選択肢に考えてもらえるようにすることも狙っている。連絡会では今後、より深い認知症の学習や、行きたい場所が分からなくなっている人への接し方を実習する訓練なども研修プランとして描いている。

### 障害者のスポーツ活動支援 SON・石川 チャリティー茶会

中日新聞 2017年11月20日



抹茶を味わう来場者=金沢市本多町で

知的、発達障害者のスポーツ活動を支援するNPO法人「スペシャルオリンピックス日本(SON)・石川」主催のチャリティー茶会が十九日、金沢市本多町の市立中村記念美術館旧中村邸であり、約二百人が抹茶と和菓子を味わった。

加藤宗幽社中(かほく市)の十六人がボランティアとして協力。和服姿で来場者にお点前を披露した。会場にはSON・石川に登録する選手の活躍を紹介

するパネルも展示された。

一人あたりの料金二千円から会場費や材料費を引いた額を、SON・石川が催す競技会の運営費などに充てる。事務局ボランティアの大浜美映子さん(67)は「協力者、来場

者に感謝している。SONのことを少しでも知ってもらえればうれしい」と話していた。  
(小坂亮太)

「猪飼野せんべい」完成 「難波津の歌」碑モチーフ 大阪日日新聞 2017年11月20日  
平安期の和歌で、朝鮮半島の百濟からの渡来人・王仁(わに)博士の作とされる「難波津(なにわづ)の歌」をモチーフにした商品「猪飼野(いかいの)せんべい」が完成した。大阪市立御幸森小(同市生野区)で長年教壇に立った元教諭、足立須香さん(59)が大坂生野コリアタウンの新たな土産物として企画、地元の識者の協力を得て念願がかなった。売れ行きはまずまずで「いろいろなご縁が重なった。自分だけではできなかったのでうれしい」と、喜びをかみしめている。



「猪飼野せんべい」の完成を喜ぶ(左から)松田さん、足立さん、足代さん、宋悟さん  
歌碑がモチーフの焼き印を入れた「猪飼野せんべい」

「難波津の歌」は約1600年前、王仁博士が御幸森天神宮の主神・仁徳天皇の即位を祝して詠んだと伝わる。2009年10月には、多文化共生社会の実現を願う地域の人々の尽力によって、タウン西側に位置する同宮境内に歌碑が建立された。



#### ■思いが形に

教職員の研修担当を務めていた足立さんは、古代から由緒があり地域学習にも生かせる猪飼野に着目。地域史発掘に取り組む「猪飼野探訪会」の足代健二郎さん(75)から、歴史などを教わった。児童らとともに歌碑の除幕式にも参列し、「古代から現代に至る多文化共生のシンボルに思えた」と、当時を振り返る。

かねて「観光客であふれるコリアタウンで、このまちのオリジナル商品があれば」というおぼろげな思いはあった。足代さんの紹介で区内の和洋菓子製造業「文楽せんべい」で、オリジナル焼き印のせんべいが受注可能と聞き、構想が急速に具現化した。

縁がある「韓寺を歩く会」主宰の松田圭悟さん(77)、NPO法人クロスベースの宋悟代表理事(56)からもアドバイスを受け、順調に商品化。1パック6枚入り(500円)のせんべいには、猪飼野や歌碑の解説文も同封した。

焼き印は足立さんの元教え子で、現在デザインを学んでいる伊藤春香さん(25)が担当し、歌碑の「難波津」をハングルで記した。パッケージの図案は同宮宮司の長女で画家の森田明子さん(36)に依頼した。

#### ■子どもの将来に

子どもたちを猪飼野ナビゲーター(案内人)にと育成に尽力する足立さんは、商品化に当たり「御幸森子どもプロジェクト基金」の構想も盛り込んだ。1パックの売り上げのうち100円を基金とし、子どもたち自身が新たな土産物を開発するなどの活動費用に充てるという。

商品は現在、イベントなどで不定期に販売中だ。「大人も子どもも育て、まちも発展するのが一番」と語る足立さん。「子どもたちが地域と連携して学習の幅を広げ、自分たちでアイデアを出して伸びてくれることを信じたい」と大きな期待を込めた。

「猪飼野せんべい」の問い合わせは電話 080(5929)3486。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

